

Shakespeare における ‘Give it me’ 型二重目的語構文

長崎大学教育学部 松元浩一

1 Shakespeare の英語には (1) に示すような ‘Give it me’ 型の二重目的語構文がしばしば観察される。

(1) a. I never gave it him. (OTH V, ii, 67)

b. I saw her laid low in her kindred’s vault,

And presently took post to tell it to you. (ROM V, i, 21)

この形式は通常の二重目的語構文とは異なり、直接目的語と間接目的語が共に代名詞であり、前置詞 *to* (または *for*) を伴わずに間接目的語が文末に生起する。

小論では *The Two Noble Kinsmen* と *The Reign of King Edward the Third* を除く Shakespeare の 44 作品を取り上げ、この形式に関する特性を今日の英語とも比較しながら考察したい。

2 Hemingway の *The Sun Also Rises* (1926: 110) には、ある作中人物が次の台詞を言うくだりがある。

(2) They gave it me.

Jespersen (1927: 14.7.6)、Curme (1931: 97)、Quirk et al. (1985: 1396) は、(1) (2) に挙げた構文はイギリス英語にしばしば観察され、アメリカ英語には稀にしか観察されないとする。事実 (2) はこの作品の英国人人物の台詞である。また、こうしたふたつの代名詞をとる二重目的語構文には、‘Give it me’ 型のほかに、次例 (3) に示すような ‘Give me it’ 型の形式も英米語において可能である。

(3) John gave him it.

この形式は通常の二重目的語構文と同じ統語構造をもち、「人」を表す間接目的語が動詞の直後に生起している。江川 (1964:189) は (3) に挙げた形式は今日の英米語では稀であるとする。しかし実際は次の (4) に示すとおり、少なくともイギリス英語の口語に関しては、(1) (2) に挙げた ‘Give it me’ 型よりも本形式のほうがおおよそ二倍多く観察される。

(4)	CONV	FICT	NEWS	ACAD
‘Give me it’ 型	■■■■■	□	□	□
‘Give it me’ 型	■■	■	□	□

(Biber 1999: 929)

Register: CONV= Conversation, FICT= Fiction, NEWS= Newspaper language,
ACAD= Academic prose. Each ■ represents 10 and □ less than 5.

今日のイギリス英語において、江川の指摘とは対照的に、‘Give me it’型が‘Give it me’型よりも数多く観察されるのは、「人」を表す間接目的語が動詞の直後に生起しているために、典型的な二重目的語構文の統語構造に合致しており、‘Give it me’型よりも主題関係が明確である為だと考えられる。(cf. Biber 1999: 930) また今日のイギリス英語では、‘Give me it’型と‘Give it me’型はともに、談話やフィクションに専ら多く観察される。このことは、間接目的語にのみ代名詞をとる典型的な二重目的語構文(‘John gave me a book.’)も談話やフィクションに数多く観察されることや、ふたつの代名詞をとる両形式は誤解を避けるために、新聞、書類、アカデミックな文書では余り用いられないこととも関係している。(cf. Biber 1999: 389-930)

では、こうした今日の状況に較べて、かつてはどのような分布であったのであろうか。以下では両形式を比較しながら、Shakespeareの英語について考察してみたい。

3 Shakespeareの作品を‘Give it me’型(以下、A型)と‘Give me it’型(以下、B型)に分けて調査してみると次のような結果が得られる。(TextはEvans, G. Blakemore, (ed.), *The Riverside Shakespeare* (Second Edition). Boston: Houghton Mifflin, 1997に、作品の略称はSpevack, M., *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Hildesheim: Georg Olms, 1973に拠った。括弧は用例数を表す。)

A型: ask (2), bring (5), commend (1), deny (2), do (3), fetch (2), forgive (1), give (77), grant (2), lend (4), leave (2), pay (1), play (1), render (1), sell (2), send (5), show (7), teach (2), tell (4), tender (1), throw (1), work (1) 合計 127例

B型: ask (1), bring (1), crown (1), deny (3), do (3), draw (1), forgive (1), give (28), grant (2), lend (3), offer (1), pray (1), promise (1), resolve (2), show (4), tell (36), teach (1), throw (1), warrant (1), yield (3). 合計 95例

A型には合計127例、22種の動詞が、B型には合計95例、20種の動詞が観察される。⁽¹⁾先の(4)に見た今日の英語における分布と比較すると、Shakespeareの英語はA型のほうが数多く観察される点で違いを見せている。このことについては改めて後述する。

また、Shakespeareのほかにも、初期近代期の散文についても同様の調査を試みた。

	A型	B型		A型	B型
I	1	0	V	5	0
II	2	0	VI	0	0
III	2	1	VII	0	1
IV	0	0	VIII	4	1

I: Roger Ascham, *Toxophilus A* (1545), II: Sir Thomas More, *Utopia* (1551),

III: John Lyly, *Euphues* (1578), IV: Sir Philip Sidney, *The Defence of Poesie* (1595),

V: Thomas Deloney, *The Pleasant Historie of Jack of Newbury* (1597?), VI: Sir Thomas

Browne, *Religio Medici* (1642), VII: John Dryden, *An Essay of Dramatic Poesie* (1668),

VI: John Bunyan *The Pilgrim's Progress. 2 parts.* (1678-84).

資料の数は必ずしも十分とは言えないが、Shakespeare の口語に較べて散文における両形式の頻度は全く低いことから、今日の英語と同じく、本構文は初期近代期においても口語に多く用いられたと考えることができる。²⁾

一方で日下部 (1988) も Bartlett (1953) の *Concordance* を用いて、動詞 ‘give’ の A 型と B 型、および前置詞形を調査し、次のように分析している。

- (i) ふたつの人称代名詞を目的語とした用例は全部で 42 例。
- (ii) 42 例中 ‘Give you her’ (ADO V, iv, 54) は唯一 A 型ではない。
- (iii) ふたつの代名詞をとる前置詞形 ‘Give it to me’ (型) は 1 例もない。

日下部は (i) のとおり、「ふたつの人称代名詞」と述べるが、これは「ふたつの代名詞」という解釈でなければ、筆者の調査とは大きく異なってしまう。事実、日下部が挙げる用例を調べてみると、直接目的語の ‘it’ はその多くが「もの」を指す中性代名詞であって、いわゆる「人称」代名詞ではない。また ‘give’ の用例は、調査した作品の数にも抛ろうが、41 例ではなく実際は 77 例が観察される。

(ii) については、‘Give you her’ を A 型ではない唯一例とするが、実際には、B 型に対応するこの種の例は他にも 3 例存在する。³⁾ (AYL I, iii, 91; MND IV, I, 60; 1H4 II, iv, 51)

また (iii) については、筆者の調査によると ‘Give it to me’ そのものは 1 例のみだが (MV IV, i, 448)、この形式は ‘give’ だけでも他に 8 例観察される。(H5 IV, viii, 29; AWW V, iii, 110; AYL V, iv, 116 / V, iv, 117; LLL II, i, 11; TN III, iv, 215; ERR V, i, 198; SON [87], 10)

4 前節では、Shakespeare の英語は今日の英語とは異なり、A 型が B 型よりも多く観察されることを述べたが、以下では、このことに関してさらに詳しく考察したい。

英語の格は OE 以降、漸次水平化し、初期近代期の頃には代名詞を除けば、完全に消失した。Visser (1973: sect. 684) は、名詞の対格と与格の別は消失したが、二重目的語構文では間接目的語は「人」に、直接目的語が「もの」に対応したため、語順はほとんど重要でなかったと論じる。すなわち、Jespersen (1927: 14.7.4) も指摘するとおり、A 型の二重目的語構文では目的語は共に代名詞であり、格が保存されていることも手伝って、代名詞 ‘it’ は「もの」、文末の代名詞は「人」という区別が容易であった。そのため前置詞 ‘to’ を伴わずとも、格を有していた頃の総合的な古い形式でも誤解は生じなかったと考えられる。他方、‘John gave it my daughter.’ のように、文末の間接目的語に普通名詞をとる A 型の二重目的語構文は、普通名詞に付く前置詞 ‘to’ を省略して派生されたと日下部 (1988) にはあるが、説得的な説明とは言えない。Visser が指摘するとおり、間接目的語が「人」、直接目的語 (代名詞 ‘it’) が「もの」という対応が確立していたために、この時代でも ‘John gave it my daughter.’ は前置詞を用いない、格を保存していた頃の古い形式を留めていると考えるのが妥当であろう。このことは次のような例からも窺える。

- (5) a. Therefore we banish you our territories. (R2 I, iii, 139)
- b. Say that the sense of feeling were bereft me. (VEN, 439)

これらの例は今日であれば、それぞれ ‘Therefore we banish you **from** our territories.’ ‘Say that

I was bereft of the sense of feeling.’ となるべきところであるが、Shakespeare には格を有していた頃の古い形式が残っている。(cf. 松元 (2001)) つまり、(5)に挙げた用例とその前置詞形は、格の水平化、消失によって、特に通格をとるようになった普通名詞の形態では文法関係を明確に表せなくなったことから、今日では前置詞が用いられるようになったことを物語っている。したがって、文法関係を明示しようとして導入された前置詞 ‘to’ を敢えて省略するという日下部の説明は説得力を欠く。むしろ、間接目的語に普通名詞をとる A 型も、(5)と同じように格を有していた頃の古い形式の名残りであると考えたほうがよい。

Jespersen (1927: 14.7.4)は A 型について、本来 ‘Give it to me’ であったものが、文中の ‘it to’ が弱化して [ittə] または [itə] となり、やがて [ə] が脱落して派生されたとするが、この説明も検討の余地がある。仮に Jespersen の説明が正しいとすれば、今日のアメリカ英語でも、‘ought to’ [ɔ:tə] ‘used to’ [ju:stə] のような弱形が見られるので、‘Give it to me’ 型から派生した弱形の A 型も存在するはずであるが、しばしば指摘されるように、アメリカ英語ではこの形式はほとんど見られない。

また ‘I .. gave it a judge’s clerk.’ (MV V, i, 57) の例では、間接目的語が通常的位置から Heavy-NP Shift (以下、HNPS)によって移動していると考えられるかも知れない。しかし、次例に見るように、今日の英語では間接目的語の名詞句を HNPS により移動することはできない。

(6) *John gave _i a book about roses [the man in the garden].

まして、ふたつの「代名詞」を含む A 型を間接目的語の移動によって説明することは統語上、また情報構造上、妥当でない。しかし、接語化されていると考えることは可能であろう。Shakespeare では 127 例の A 型のうち、111 例が直接目的語に ‘it’ をとる。そのうち 12 例は、この ‘it’ は強勢のない弱音であるために、動詞と縮約された形式 (‘give’t’) で現れる。このことから ‘it’ は動詞に接語化されて、動詞とともに単一の構成素を成していると考えられる。ただ、Shakespeare には A 型と B 型が観察されるので、例えばスペイン語の二重目的語構文のように、常に「間接目的語+直接目的語+動詞」の順で接語化しているとは限らない。

5 これまでの考察から、Shakespeare における ‘Give it me’ 型二重目的語構文は、今日の英語と同様、散文よりも口語に多く見られることがわかった。また、当時の英語では ‘Give me it’ 型よりも多く観察され、逆に ‘Give it to me’ 型はごく僅かしか観察されなかった。このことは、‘Give it me’ 型が対応する前置詞形は未だ標準形としては確立されていなかったことを示しており、今日の英語とは異なる様相を呈している。⁴⁾ それはひとつには、初期近代期にはまだ格が存在したころの名残りがあって、前置詞を伴わずとも、直接目的語と間接目的語がもつ意味的な機能により、‘Give it me’ 型が保証されたことによる。しかし、前置詞が発達するにつれ、文法関係を明示できる前置詞形や、典型的な二重目的語構文と同じ統語構造と主題関係を有する ‘Give me it’ 型の頻度が増して、今日のような ‘Give it me’ 型と ‘Give me it’ 型の分布に至ったと考えられる。

さらに、‘Give it me’ 型二重目的語構文は前置詞 ‘to’ の省略によって派生したとする

説明や音の弱化によって前置詞形から派生されたとする説明は妥当とは言えないことを他の例を示しながら考察した。

ここで取り上げた ‘Give it me’ 型、‘Give me it’ 型、‘Give it to me’ 型の差異や分布については英国内でも多少異なっているので説明を要するが、紙面の都合上稿を改めることとしたい。

註

- (1) A 型か B 型か半然としない例が 33 例、17 種の動詞に観察される。例えば、話題化 (This thou tell'st me. [TRO I, i, 59]) や受動化 (It was lent thee all that blood to kill. [LUC, 627]) に関与している場合がそうである。
- (2) 宮原 (2000) は *Authorized Version* (AV) (1611) と AV の Cruden's 版を調査して、共に ‘Give it me’ 型の用例が最も多く見られ (11 例と 12 例)、ついで ‘Give it to me’ 型が僅かに見られたが (2 例と 1 例)、‘Give me it’ 型は全く用例が見られなかったことを示している。ここでも本節で見た散文の用例と同様、多くは見られない。
- (3) ふたつの代名詞をとり、A 型に属する例も数例観察される。例えば、‘he hath left them you.’ (JC III, ii, 249); ‘you will give them me.’ (2H6 III, i, 345); ‘Give him me.’ (TRO III, ii, 105); ‘I gave him you, the noblest that survives,’ (TIT I, i, 102); ‘Will you ... give me this maid, your daughter?’ (ADO IV, i, 26) など。
- (4) ‘Give it me’ 型二重目的語構文は他の ‘Give me it’ 型や ‘Give it to me’ 型よりも初期近代期には優勢であったことを竹林ほか (1988: 101) や宮原 (2000) が示唆している。

参考文献

- Biber, Douglas, et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Egawa, Tai-ichiroh (江川泰一郎) 1964. 『英文法概説』東京: 金子書房.
- Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part III: syntax*. Heidelberg: Carl Winter.
- Kusakabe, Tokuji (日下部徳次) 1988. 「Shakespeare の英語 – give it me –」 *SELL* 5, 59–67.
- Matsumoto, Koh-ichi (松元浩一) 2001. 「Shakespeare における奪取、分離、排除を表す二重目的語構文」 *The Kyushu Review* 6, 63–73.
- Miyahara, Kazunari (宮原一成) 2000. 「‘He gave it me’ の解釈に関して—現代英国小説 *Darkness Visible* (1979) の中の一文から—」英語史研究会第 4 回大会 於九州大学 2000 年 9 月
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Visser, F. Th. 1973. *An Historical Syntax of the English Language, I & III – 2*. Leiden: E. J. Brill.